横顔 就任インタビュー

環境整備と研究推進 組織改革目指し貢献

体制刷新に向けて動きだした東京女子医科大学。血液内科学分野のトップに就任した瀬尾幸子氏は、さらなる診療レベルの向上を志す一方、男女を問わず働きやすい環境を整備、患者に還元する研究にも力を注ぐ。

東京女子医科大学 血液内科学分野
瀬尾 幸子（せお さちこ） 教授
1996年東京大学医学部卒業。米フレッドハッチンソンがん研究センター、国立がん研究センター東病院、獨協医科大学准教授などを経て、2024年から現職。
東京女子医科大学 血液内科学分野
東京都新宿区河田町8-1 ☎03-3353-8111（代表）
https://www.twmu.ac.jp/dh/

当初は外科医志望だったが、学生時代に米国での病院実習を経験、研修医時代には薬剤や移植が目覚ましい進歩を遂げている血液内科の変革期を実感し、やりがいを感じて方向転換した。

ダイナミックな治療は、外科に通じるものもある。患者と共に歩んでいく大切さを含めて、科の魅力をもっと知ってもらい、ニーズに応えるために、教室員をもっと増やしたいと思っている。

現在総勢18人の教室員のうち女性が約3分の2を占める。近年、男性が育児に参加することもあれば、身内の介護や自分自身の病気もあり得る。「それぞれの事情に柔軟でありたい。皆がチームとして補い合えるような環境を整備したい」と語る。

女性医師が出産・育児を経ても働きやすい土壌もある。血液内科は多少のブランクがあっても論文などでキャッチアップしやすく、時間外の急患対応も少ない。女性のロールモデルが多いことも特徴だ。

患者と共に歩んで希望する医療提供

大学病院として、あらゆる血液疾患に対応し、薬物療法から移植・免疫細胞療法まで、多彩な先進医療を提供している。

臨床面で目指しているのは、患者・家族が望んでいる医療を提供することだ。

血液疾患の治療は日進月歩で、根治に至る症例が増えている。治癒が患者の希望であることは間違いないが、根治が難しいケースや高齢の患者では、事情がやや異なってくる。「その人らしい人生を歩んで、家族も良かったと思える時間を過ごせるかを大事にしたいと考えている」と語る。

それは治療の手を抜くという意味ではなく、病と闘いたい人には闘う手伝いをし、穏やかな時間を過ごしたい人には、そうした環境を整えて支援することだ。

瀬尾氏自身は若い頃、治癒させることに目を向けがちだったが、キャリアを積んでいくうちに、価値観がシフトしてきたという。

感染症管理を研究 移植成績の向上を

教室員の研究への意欲は高く、アイデアの発表、助成金への応募、学会への抄録提出など、積極的に行動している。

これまで教室で培ってきたテーマに加え、瀬尾氏自身が抱える移植と感染症というテーマも継続して研究していきたいという。

長らく移植医療を行う中で、感染症管理の重要性を痛感することになった。移植後は免疫抑制を行うが、感染症を発症する人としない人がいる。どんな人が発症するのか、発症しない人では、免疫がいかに賦活化（ふかつか）されているか、患者検体を用いた研究を行う予定だ。その成果が、移植成績の向上に還元できると期待する。

最高レベル目標に 人間万事塞翁が馬

究極の目標は、「東京女子医大血液内科に行けば、何でもそろっていると思ってもらえる。あそこでできなかったら、日本ではできないと言われる」までに、診療レベルを高めることだ。

真摯（しんし）であること、そして「人間万事塞翁（さいおう）が馬」という言葉を大事にしている。人生の運・不運は、一見では分からない。若手医師には、「一喜一憂しないで、今つらい事も良い事に変わるから、落ち込まないように」と励ましの言葉を掛ける。

東京女子医大は今、組織を挙げて変革しようという機運に満ちている。

「内外にエネルギーがあふれているので、臨床に秀でた組織のために一層貢献していきたい」